

「軍事化に進む安倍政権」

2015年03月10日

『東京新聞』の3月6日の夕刊に、JT生命誌研究館館長の中村桂子氏が『わからない… 軍事への傾斜 国際貢献の基本は平和』と題して寄稿している。「なぜこんなに軍事の方向に動きたいのだろう。政府開発援助（ODA）大綱を「開発協力大綱」とし、これまで対象外であった他国軍支援を一部容認することが閣議決定された」と知り、内容を読んでの率直な感想だ」と書き始めている。ODAは1961年から、戦後補償の一環として始まり、徐々に国際貢献の重要な柱になっていった。ODAは目的から外れて用いられたり、環境破壊や軍事政権を支える事例など、批判もあった。しかし「ODA大綱」は人道的考慮、相互依存、環境保全、自助努力という指針であった。1965年からは、青年海外協力隊（JICA）が始まり、88ヶ国、4万人以上の若者たちが活躍してきた。農業の技術指導、スポーツ指導、手芸品の商業開発など、共にあろうとする姿勢は日本人への信頼を得て来た。これらの活動は、貧困や差別を取り除き、平和を求めることを基本としていた。平和憲法を持つ日本が軍事とは関係のない活動であった。それが、一転して軍事支援を容認することを閣議決定した。なぜ、軍事に傾くのかと中村氏は嘆き、問うている。

『週刊金曜日』の1030号の投書欄に、三田慶三氏は『安倍総理のモンスター化』と題し「あまたいる歴史修正主義者のひとりに過ぎないと思っていた安倍晋三総理はモンスター化してきたように思う」と書き始めている。私も同感で、恐怖をさえ感じている。

特定秘密保護法、集団的自衛権容認の閣議決定、武器輸出三原則の解禁、「周辺事態」の「周辺」を削除し、自衛隊を世界のどこにでも派遣できる。米軍だけでなく、友好国と言われるどの国の軍隊とも協働して戦う。軍隊の暴走に歯止めをかける「文民統制」も否定する。「新事態」などという言葉で危機を煽り、その時には、首相が自衛隊出動を命令できる体制を作り上げようとしている。留まることのない戦争準備を、考えられない速さで進めている。戦後70年、平和憲法の下で、平和を迫ってきた日本を、まさにモンスターのように破壊しようとしている。憲法9条は実質的に葬り去られていく。

自民党の河野洋平元衆院議長は講演で、安倍首相について「自民党がこれ以上『右』に行かないようにしてほしい。いまは保守政治というより、右翼政治のような気がする」と語った。そして「保守は物事を変えるにあたって前に進むこともあるが後ろに下がりもする。つまり、穏やかに穏便にことを進める政治。右翼は前にどんどんと突き進むだけで戻らない政治」と説明したという。ニューヨーク・タイムズ紙の東京支局長のマーティン・ファクラー氏は安倍政権について次のように語ったという。「海外では安倍政権は右翼的、極右的とみられている。1955年に結党した自民党は『憲法改正』がスローガンだが、それは建前で、実際には現実に即した保守政治でやってきた。だが、この建前を本当にやってしまおうというのが安倍政権。これはもはや保守とは呼べない。」「保守」「右翼」「極右」の中で、もはや「極右」であると言っている。平和を主眼としたODAも軍事化させようとするのだから「極右」と言われても仕方ないだろう。

今夏、安倍首相は「戦後70年談話」を出すとやっているが、世界は注目している。アジア・太平洋戦争の罪責を認め、世界に平和を発信する談話であってほしいと心から願う。ドイツのヴァイツゼッカー大統領の「荒れ野の40年」の演説のような、言葉に真実と力を持つ談話が出されるなら、アジア諸国から、そして世界から信頼を得ることができる。日本は曲がり角に立っている。安倍首相の戦争する国への暴走を許してはならない。